HAGI 萩

題字は吉田松陰筆跡

WINTER ISSUE 2016
78

歌川国芳《誂染好の色取 ふじ鼠》

団扇絵判錦絵　嘉永6年（1853）

HAGI URAGAMI MUSEUM

エッセイ

茶の湯における萩焼の魅力について

茶の湯の世界では茶事に臨む亭主と客の心構えを「一期一会」という言葉で表現します。千利休の弟子山上宗二が利休の言葉として「一期に一度」と用いたのが最初であり、幕末に井伊直弼が「一期一会」として広めたことで今日に至ります。客も亭主もこの茶事が二度と繰り返されることのない一生に一度の出会いであることを心得て互いに誠意を尽くしなさいと説くこの教えは、日本に昔からあるおもてなしの心を私たちに教えてくれます。茶事をひらくにあたり亭主はまず自分の思うテーマに合わせた掛物を選びます。そしてこのテーマを伝えるために釜や棚、茶器や茶杓、茶碗や水指などの道具を取り合わせます。夏の暑い日の茶事では、掛物や花で涼しさを演出するのは勿論ですが、炭火が見えにくいように風炉は小さいものを、水指は水の面を大きく見せる平水指を使うなどして、茶室内の暑さが少しでも和らぐよう工夫します。また一年の中で最も寒い時期は、春を待ちわびる梅や椿、豊かな湯気を立てる広口釜や見込みの深い筒茶碗を取り合わせます。外からの客に温かいおもてなしをしたいと思う亭主の気持ちを感じる季節でもあります。こうして亭主は茶事のテーマと道具が持つ役割やつながりを考慮しながら道具の取り合わせを行い、客は亭主が選んだ道具からその想いを汲み、一生に一度のおもてなしに応えるのです。

こうした茶人たちが、茶道具として好んだものの中に萩焼はあります。唐物を尊ぶ思想から侘びというありのままの自然な姿を美しいと感じる美意識の変化を山上宗二は自書『山上宗二記』中で「惣別茶碗之事、唐茶碗ハ捨リタル也、当世ハ高麗茶碗、今焼茶碗、瀬戸茶碗以下迄ナリ、比サヘ能ク候ヘハ数寄道具ニ候也」と記しています。こうした美意識の変化は、その後の萩焼の誕生に大きな影響を与えたと考えられます。萩焼の歴史は、文禄慶長の役で連れ帰られた朝鮮の陶工李勺光、李敬らが、1604年の毛利輝元の広島から萩への移城にともない萩の松本村に窯を開いたのが始まりです。古田織部が千利休亡きあとの茶の湯の世界を牽引し、織部スタイルという独自の美意識を確立していた時代でもありました。萩焼もそうした流れの中で、織部好み風の茶碗と高麗茶碗に造形的特徴を合わせ持つものを基本としながら展開していきました。

①

茶道具として萩焼が好まれた理由は他にもあります。昔から「なり・ころ・ようす」が茶道具における3つの要素であると言われてきました。「なり」とは形のことをさします。亭主が茶碗を置き点前を始めると、客は少し離れた場所から茶碗全体つまり形を見ます。次に茶碗が目の前に置かれ実際に手にした時に、客は「ころ」を感じることになります。重さが離れた場所から見た自分のイメージとあまり変わらず、掌の中にあって落ち着く大きさと、口縁から高台までのバランス(ちょうど良いころあい)が重要であると考えられます。そして「ようす」とは茶碗がもつ雰囲気をさしています。飲んだ後に見える見込みの部分、拝見時にわかる高台は萩焼の特徴の一つであり、その中でも高麗茶碗を写したとされる割高台は江戸初期から萩焼にとり入れられた作風で、現代においては力強い造形表現が人々を魅了し続けています。露体部分から見える土味はざんぐりという言葉で表現される柔らかくふっくらとした印象と質感を与えます。形や大きさが変わることはありませんが、その茶碗が持つ雰囲気は年月を重ね変化していきます。枇杷釉の美しさの中に柄杓からお湯を注いだ時、ほんのり温かみを増したように感じるのはこのためかもしれません。萩焼の茶碗は、使う毎に素地の色が変化し味わい深い釉調を見せるという性質があります。そうした「ようす」の変化を茶人は侘びのけしきとして好み、萩焼を取り合わせてきました。数ある道具の中で、茶碗は亭主と客の心を通わせる大切な役割を担っているのです。

②

当館では1月19日(火)より陶芸展示「茶陶萩 —伝統の革新」が始まります。江戸時代茶陶としての地位を確立した萩焼ですが、明治時代に入り藩窯から独立自営の転換を余儀なくされ厳しい状況を迎えます。急速な近代化は伝統文化の世界にも暗い影を落とし、茶道の復興を願う表千家十一代碌々斎は、日本各地を訪問し茶の湯を広め、ここ萩の地へも足を運んだといわれます。大窯業地による生産が増加する中、十二代坂倉新兵衛による表千家への入門と伝世する名碗の写しの作陶を許可されたという功績は、その高い技術への評価はもちろんのこと、千家の茶の湯と萩焼を結び、少数ではあっても江戸時代から連綿と作り続けてきた茶陶萩再興への足掛かりを築きました。また昭和に入り三輪休和が古陶磁への研究を進める中で、弟の三輪壽雪とともに萩焼の伝統である白萩釉に改良を加えた「休雪白」を開発したことは、人々が思う白を温かく柔らかいイメージへと変え、茶陶における萩焼の評価を決定付けたといっても過言ではありません。こうした功績は、伝統を継承するということが素材や技法を守るだけではなく、新しい時代を築くことでもあると私達に教えてくれているような気がします。展示室で萩焼約400年の歴史を展観するとともに、一つの茶陶から広がる茶の湯の世界をご堪能いただけますと幸いです。

③

(横山志野／当館学芸課スタッフ)

④

① 萩割高台茶碗　江戸時代前期　口径14.9㎝　当館蔵
② 萩井戸形茶碗　江戸時代中期　口径16.1㎝　当館蔵
③ 十二代坂倉新兵衛　萩刷毛目茶碗　昭和33年(1958)　口径15.0㎝　当館蔵
④ 三輪休和　萩編笠水指　昭和48年(1973)　口径26.8㎝　当館蔵

平成27年度の新収蔵資料について

本年度の資料収集活動（資料の移管・購入・受贈）を紹介します。

まず、工芸領域が山口県立美術館から当館へ所管転換され、別表1のとおり赤間硯と金工の全資料（赤間硯10件、金工12件）が移管されました。また、浮世絵版画・東洋陶磁・陶芸という当館が美術館活動の柱とする3領域では、それぞれの専門性をより高めるための資料充実として、別表2のとおり江戸中期から明治初期までの浮世絵版画（4件）及び東アジアの古陶磁（3件）と現代陶芸（2件）、あわせて9件を購入しました。さらに、別表3のとおり東洋陶磁、金工及び現代美術の領域について、あわせて26件の資料を受贈いたしました。いずれの資料も、展示をはじめとする当館の今後の活動において、大いに活用する予定です。

このたびの資料収集にあたりまして、御寄贈くださいました皆様をはじめ、お世話になりました関係各位に心よりお礼申し上げます。

【別表1】移管資料 一覧

番号	作家名	作品名	制作年（西暦）	材質	寸法（cm）	山口県立美術館旧ID
1	堀尾卓司	赤間硯「累柿硯」	1950年	赤間石	高5.2×幅22.6×奥行29.2	C-0024
2	堀尾卓司	赤間硯「蘭花硯」	1956年	赤間石	高5.1×幅19.6×奥行31.2	C-0046
3	堀尾卓司	赤間硯「雄蕊」	1957年	赤間石	高5.0×幅20.0×奥行26.4	C-0025
4	堀尾卓司	赤間硯「豊麗」	1959年	赤間石	高5.0×幅22.8×奥行29.0	C-0026
5	堀尾卓司	赤間硯「ビルディング」	1970年	赤間石	高4.5×幅14.8×奥行20.3	C-0027
6	堀尾卓司	赤間硯「すみすり」	1979年	赤間石	高4.2×幅16.7×奥行20.2	C-0047
7	堀尾卓司	赤間硯「双体（石の枘）」（2点1組）	1970年代	赤間石	高21.3×幅41.7×奥行4.4	C-0028
8	堀尾卓司	海	1970年代	赤間石	高3.8×幅19.1×奥行13.6	C-0229
9	堀尾信夫	瓜硯	1985年	赤間石	高1.8×幅12.8×奥行15.4	C-0178
10	堀尾信夫	長方硯	1998年	赤間石	高3.4×幅10.2×奥行19.9	C-0177
11	山本晃	切嵌象嵌接合せ長皿「翔雅」	1993年	金、銀、銅及びその合金	高5.2×幅32.8×奥行12.7	C-0138
12	山本晃	接合二段箱「草叢」	1997年	金、銀、銅及びその合金	高15.2×幅13.3×奥行13.3	C-0158
13	山本晃	接合箱「紡」	1997年	金、銀、銅及びその合金	高9.5×幅21.4×奥行20.4	C-0179
14	山本晃	切嵌象嵌接合せ鉢「嵌」	1998年	金、銀、銅及びその合金	高18.8×径24.2	C-0220
15	山本晃	接合せ短冊箱「紡」	1999年	金、銀、銅及びその合金	高5.5×幅38.2×奥行9.8	C-0221
16	山本晃	接合せ箱「麦秋」	1999年	金、銀、銅及びその合金	高17.7×径14.0	C-0222
17	山本晃	銀四分一赤銅接合せ箱「青響」	2000年	金、銀、銅及びその合金	高15.0×幅23.3×奥行12.0	C-0223
18	山本晃	接合せ箱「山背」	2004年	金、銀、銅及びその合金	高8.5×幅22.0×奥行20.0	C-0224
19	山本晃	切嵌象嵌接合せ箱「静唱」	2008年	金、銀、銅及びその合金	高21.0×幅19.5×奥行16.0	C-0231
20	山本晃	切嵌象嵌接合せ箱「白椿」	2009年	金、銀、銅及びその合金	高15.5×幅25.3×奥行13.3	C-0232
21	山本晃	切嵌象嵌接合せ箱「夕茜」	2010年	金、銀、銅及びその合金	高19.3×幅23.8×奥行11.4	C-0233
22	山本晃	接合せ金銀盛器「輝翔」	2014年	金、銀、銅及びその合金	高14.5×幅11.0×奥行31.7	C-0230

【別表2】購入資料 一覧

番号	制作者名	作品名	制作年（西暦）	制作年（和暦）	時代区分	制作地	材質	技法	寸法（cm）
23	小林清親	東京小梅曳船夜図	1876年	明治9年	明治	日本	紙	木版画（錦絵）	横大判
24	歌川豊広	梅に鷹	1804-17年	文化年間	江戸	日本	紙	木版画（錦絵）	間短冊判竪2枚続
25	鳥居清満	尾上菊五郎梅幸 ひたち小はぎ	1765年	明和2年	江戸	日本	紙	木版画（紅摺絵）	細判
26	鳥居清満	市村羽左衛門 蜘蛛のぱけ子ぞう	1765年	明和2年	江戸	日本	紙	木版画（紅摺絵）	細判
27	不詳	青花牡丹文盤	15-16世紀		黎朝	ベトナム	陶磁	磁器・青花	高6.7×口径36.3
28	不詳	絵唐津葉文鉢	16世紀		桃山	日本・唐津	陶磁	陶器・鉄絵	高6.7×口径19.0-17.0
29	不詳	備前種壺耳付水指	17世紀		江戸	日本・備前	陶磁	炻器・無釉	高17.2×胴径15.2
30	Seok Changwon	Self-portrait	2013年		現代	韓国	陶磁	陶像・色絵付	高72.0×幅34.0×奥行32.0
31	木村芳郎	碧釉漣文壺	2014年	平成26年	現代	日本	陶磁	磁器	高39.0×胴径44.0

【別表3】受贈資料 一覧

番号	制作者名	作品名	制作年（西暦）	制作年（和暦）	時代区分	制作地	材質	技法	寸法（cm）	御寄贈者
32	不詳	青花双鶏文皿	17世紀		明	中国・景徳鎮	陶磁	磁器・青花	高3.6×口径21.0	浦上敏朗様
33	山口宏	鍛赤銅壺「花と龍」	1995年	平成7年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高14.6×胴径20.3	山口フクエ様
34	山口宏	鍛赤銅壺「風韻」	1997年	平成9年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高25.0×胴径18.5	山口フクエ様
35	山口宏	鍛赤銅壺「風の唄」	1999年	平成11年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高13.2×胴径22.2	山口フクエ様
36	山口宏	鍛赤銅象嵌花器「風紗」	1999年	平成11年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高17.5×胴径18.0	山口フクエ様
37	山口宏	鍛赤銅壺「海峡」	2000年	平成12年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高22.0×胴径19.0	山口フクエ様
38	山口宏	鍛赤銅重線象嵌幾何文壺	2003年	平成15年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高20.0×胴径16.0	山口フクエ様
39	山口宏	鍛赤銅重線象嵌壺「鈴しぐれ」	2004年	平成16年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高25.0×胴径18.0	山口フクエ様
40	山口宏	鍛銅象嵌花器「糸車」	2005年	平成17年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高19.0×胴径13.0	山口フクエ様
41	山口宏	鍛赤銅重線象嵌幾何文壺	2005年	平成17年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高19.5×胴径16.5	山口フクエ様
42	山口宏	鍛赤銅重線象嵌壺「群唱」	2008年	平成20年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高19.1×胴径15.5	山口フクエ様
43	山口宏	鍛銅くずし角文花入「土の塔」	2009年	平成21年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高21.5×胴径12.0	山口フクエ様
44	山口宏	鍛銅線象嵌壺「立夏」	2009年	平成21年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高18.0×胴径16.0	山口フクエ様
45	山口宏	鍛赤銅象嵌花器「東雲」	2011年	平成23年	現代	日本	金、銀、銅及びその合金	鍛金	高14.0×胴径22.0	山口フクエ様
46	宮永愛子	そらみみみそら［五月雨御殿］	2014年	平成26年	現代	日本	陶・アクリル樹脂・ガラス・鉄	インスタレーション	茶室（四畳半）及びバルコニーの面積と同大	宮永愛子様
47	不詳	紅陶尖底瓶	紀元前5,000年紀		新石器	中国・半坡文化	陶磁	土器	高28.0×最大幅15.0	福島サト子様
48	不詳	印文硬陶小壺	紀元前4～3世紀		戦国	中国	陶磁	土器	高5.0×胴径9.0	福島サト子様
49	不詳	黒陶双耳壺	紀元前2～1世紀		前漢	中国・理蕃文化	陶磁	土器	高15.0×最大幅18.0	福島サト子様
50	不詳	灰釉双耳壺	紀元前2～1世紀		前漢	中国	陶磁	陶器	高18.5×最大幅28.0	福島サト子様
51	不詳	緑釉羊圏	1～2世紀		後漢	中国	陶磁	陶器	高6.2×口径19.0	福島サト子様
52	不詳	灰陶牛	3～4世紀		西晋	中国	陶磁	陶器	高10.0×幅20.5×奥行6.3	福島サト子様
53	不詳	白釉褐彩蓮弁文三耳壺	6世紀		北斉	中国	陶磁	陶器	高12.3×胴径12.0	福島サト子様
54	不詳	白磁兎耳壺	8世紀		唐	中国	陶磁	磁器	高16.0×胴径20.0	福島サト子様
55	不詳	白磁壺	8世紀		唐	中国	陶磁	磁器	高11.3×胴径17.0	福島サト子様
56	不詳	白釉瓜形壺	10世紀		五代～北宋	中国・磁州窯系	陶磁	炻器	高110×胴径15.0	福島サト子様
57	不詳	青磁杯	11～12世紀		北宋	中国・耀州窯系	陶磁	炻器	高4.0×口径10.0	福島サト子様

移管資料（一部）

7
堀尾卓司（1910～86）
《赤間硯「双体（石の枘）」》
1970年代（昭和45～54）

22
山本晃（b.1944）
《接合せ金銀盛器「輝翔」》
2014年（平成26）

購入資料

23

25

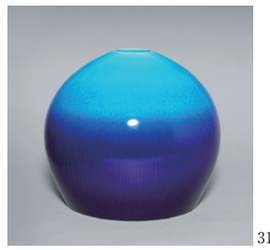
26

27

28

29

30



31

24

23 小林清親（1847～1915）《東京小梅曳船夜図》 1876年（明治9） 横大判錦絵
24 歌川豊広（1774～1830）《梅に鷹》 1804～17年（文化年間） 間短冊判竪2枚続錦絵
25 鳥居清満（1735～85）《尾上菊五郎梅幸 ひたち小はぎ》 1765年（明和2） 細判紅摺絵
26 鳥居清満 《市村羽左衛門 蜘蛛のぱけ子ぞう》 1765年（明和2） 細判紅摺絵
27 《青花牡丹文盤》 15-16世紀 黎朝時代 ベトナム
28 《絵唐津葉文鉢》 16世紀 桃山時代・唐津焼
29 《備前種壺耳付水指》 17世紀 江戸時代・備前焼
30 Seok Changwon（b.1966）《Self-portrait》 2013年 韓国
31 木村芳郎（b.1946）《碧釉漣文壺》 2014年（平成26）

受贈資料（一部）

32
《青花双鶏文皿》（古染付）
17世紀 明時代 中国・景徳鎮
浦上敏朗様御寄贈

34
山口宏（1931～2012）《鍛赤銅壺「風韻」》
1997年（平成9）
山口フクエ様御寄贈

春景色

普通展示（浮世絵）

会期 ● 平成28年1月19日［火］～ 2月21日［日］

江戸の人々は四季を通じて神社・仏閣への参詣、名所見物などの物見遊山に出かけ、それらは暮らしのなかの楽しみとして定着していました。草木が芽を出し、さまざまな花が咲く春は、旧暦では一・二・三月にあたります。この季節には、梅や桜といった花の名所が人々で賑わい、浮世絵にも江戸や諸国の春景色、春の花を取り合せた美人画などが描かれています。今回は歌川広重の作品を中心に、浮世絵に描かれた春をお楽しみいただきます。

歌川広重「京都名所之内 あらし山満花」横大判錦絵　天保5年（1834）頃

豊原国周の美人画

普通展示（浮世絵）

会期 ● 平成28年2月23日［火］～ 3月27日［日］

豊原国周（1835～1900）は、幕末から明治時代に活躍した浮世絵師です。はじめ豊原周信について羽子板押絵の原図を描いたとされ、歌川国貞に入門した後、安政2年（1855）頃から国周と署名するようになりました。江戸っ子と伝えられる人柄のとおり、文明開化のさなかにも伝統的な様式の浮世絵を描き続けました。

「明治の写楽」と称され、役者絵の評価が高い国周ですが、美人画も数多く手がけています。今回は国周の美人画を取り上げ、初期の作品から代表的な揃物を含む31点をご紹介します。

豊原国周「錦織武蔵の別品 衣更」大判錦絵　明治16年（1883）

朝鮮時代のやきもの

普通展示（東洋陶磁）

会期 ● 平成27年12月8日［火］～平成28年3月27日［日］

朝鮮時代（1392～1910年）の社会は、文班（文官）と武班（武官）のいわゆる「両班」が、王のもと政治の中心にいた時代でした。彼らの思想の基盤には仁や礼を重んじる儒教があり、そのため様々な儀式が行われました。また、風流を解することも重視され、書画や詩歌、管弦などの遊びも愛好されました。このように彼らが築いた文化では、様々な場面に合わせたやきものが使われました。儀式で使われる器、書画や詩歌などに親しむ際には硯や水滴、筆筒などの文房具が使われ、この時代に作られたやきものの特徴となっています。

朝鮮時代を代表する粉青沙器や白磁をはじめ、青花磁器、鉄釉、瑠璃釉、高麗茶碗など、当時の社会や文化を色濃く映した多種多様な朝鮮時代のやきものの魅力を紹介します。

白磁壺　朝鮮時代　17世紀後半～18世紀前半　高さ 36.3cm

茶陶萩 ―伝統の革新―

普通展示（陶　芸）

会期 ● 平成28年1月19日［火］～ 5月8日［日］

茶事に必要な各種の道具類は茶道具と総称され、そのうち陶磁製のものが茶陶と呼ばれます。

この呼称は、昭和10年代（1935～44）から用いられ始め、美術展覧会や出版物のタイトルとして、昭和30年代（1955～64）以降に定着した用語です。その背景には、室町時代から桃山時代にかけて隆盛した、茶の湯と美術・工芸の展開を関連づけて再評価しようとする気運と、その芸術性を現代に再生しようとする作陶意識の高揚がありました。

さて、萩焼400年の伝統は、侘数寄の具足として高い声価を獲得してきた歴史に培われてきました。とくに萩藩御用窯で焼造された茶碗は、近代以降も「一楽、二萩、三唐津」と謳われるほど、その品格が茶の湯の世界で認められてきました。一方で、それは開窯草創期から当時流行の高麗茶碗の造形的特徴をアレンジし、また古田織部好みの「ひずみ」の美意識を取り込むなど、たんなる写し（模倣）から脱して独創の造形表現を志向する、革新的な造形思考の成果であったといえるでしょう。

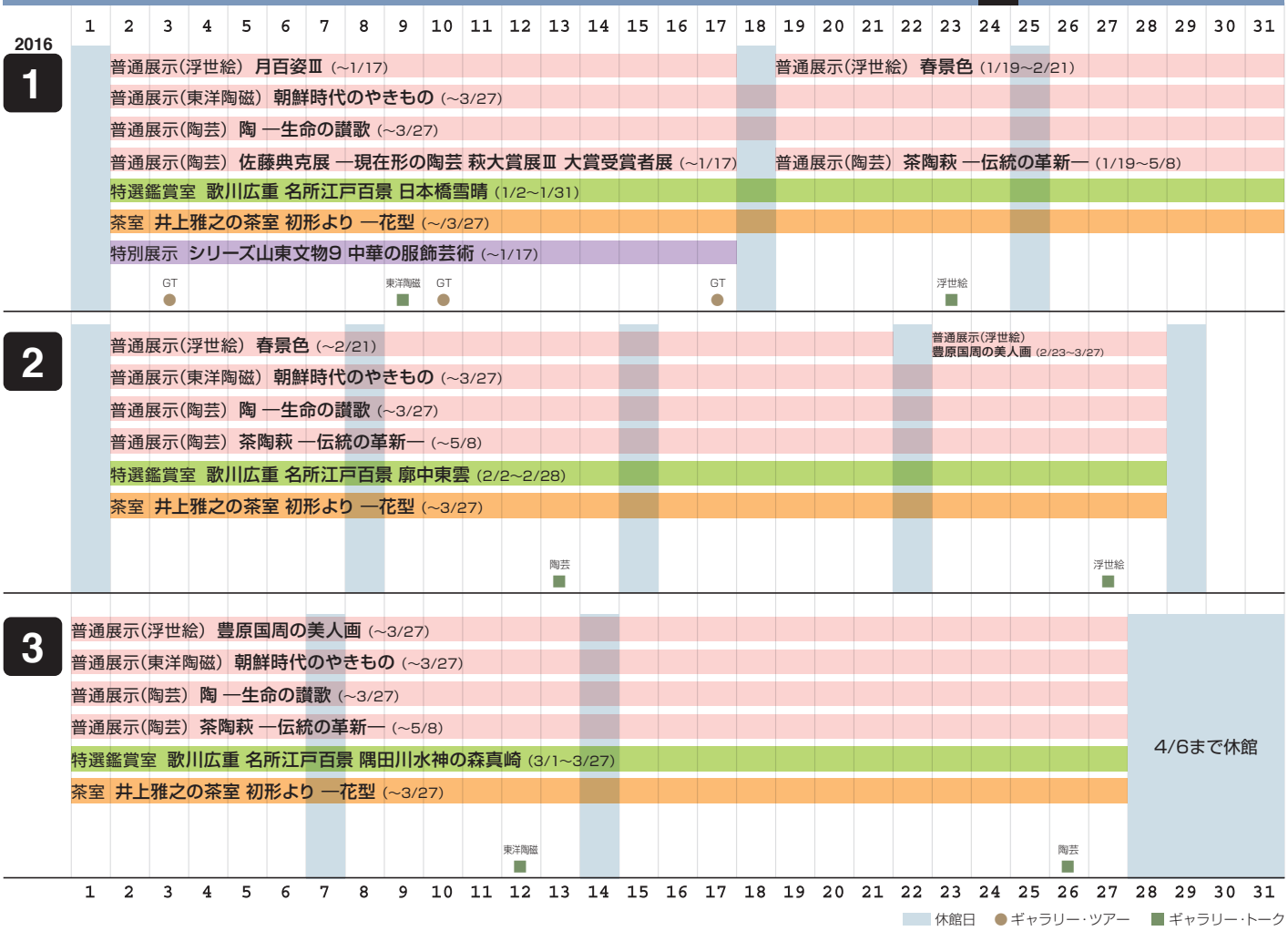
今回は、独自の気品と風格を備えた古萩（近世期の萩焼）の茶碗から、伝統の本質を固有の素材と技術のうちに見つめながら受け継いできた近代の個人作家たちの茶碗までを通観します。

姿

高台

六代林半六（泥平）　萩富士図割高台茶碗　江戸時代後期　19世紀

平成27年度（1月〜3月）日程表 Schedule



●ギャラリー・ツアー（担当学芸員による特別展示作品解説）

「シリーズ山東文物9 中華の服飾芸術」

日時●会期中の日曜日 11:00〜12:00

■ギャラリー・トーク（担当学芸員による普通展示作品解説）

いずれも11:00〜（30分程度）

1月 9日[土]　朝鮮時代のやきもの

1月23日[土]　春景色

2月13日[土]　茶陶萩 ―伝統の革新―

2月27日[土]　豊原国周の美人画

3月12日[土]　朝鮮時代のやきもの

3月26日[土]　陶 ―生命の讃歌

※ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへのご参加は観覧券が必要です。

■交通アクセス

[新山口駅から]

●防長バスまたは中国JRバスで萩バスセンター下車。萩バスセンターから徒歩約12分。

[山口宇部空港から] [萩・石見空港から]

●萩近鉄タクシー（乗合タクシー）約70分。（利用前日までに要予約）

[JR山陰本線]

●JR萩駅から萩循環まぁーるバス（西回り）約30分。

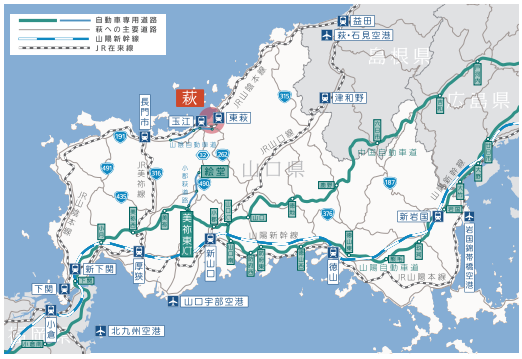
●JR東萩駅からタクシー約7分。

●JR玉江駅から徒歩約20分。

[自動車]

●「中国自動車道」美祢東JCT経由、「小郡萩道路」絵堂ICから約20分。

●「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い。



山口県立萩美術館・浦上記念館
HAGI URAGAMI MUSEUM

〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1
TEL0838-24-2400 FAX0838-24-2401
URL http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/

Find us on Facebook

季刊「萩」平成28年1月15日通巻第78号 ●発行／山口県立萩美術館・浦上記念館 ●山口県萩市平安古町586-1